

## 2020年度 地域連携活動報告書

連携先名称：福島県浪江町

協定締結日：平成 31 年 1 月 31 日

活動状況：継続中

連携先窓口：福島県 浪江町 農業課 金山信一様

活動資金：補助金

大学等の復興知を活用した福島イノベーション・コースト構想促進事業「福島県浪江町における農業“新興”に向けた取り組み」

担当教員(所属)：山本祐司(農芸化学科)、黒瀧秀久(自然資源経営学科)

活動体制(単位)：大学

関連教員(所属)：高畑健(農学部)、入江彰昭(地域環境科学部)、井形雅代(国際食料情報学部)、菅原優・小川繁幸(生物産業学部)

活動目的：

浪江町の農業復興のボトルネックとなっている“ソフト面”を支援するため、東京農業大学の“復興知”を結集し、(株)舞台ファームと浪江町とともに「産官学一体」となって、学生を中心とした取組みを展開し、① 就農拡大への取組み ② 6次産業化推進の取組み ③ スマート農業推進の取組みを行うことによって“復興”から一歩進んだ挑戦を含む農業の“新興”を目指す。

活動内容・成果：

### 1. 主として6次産業化推進に向けた事業

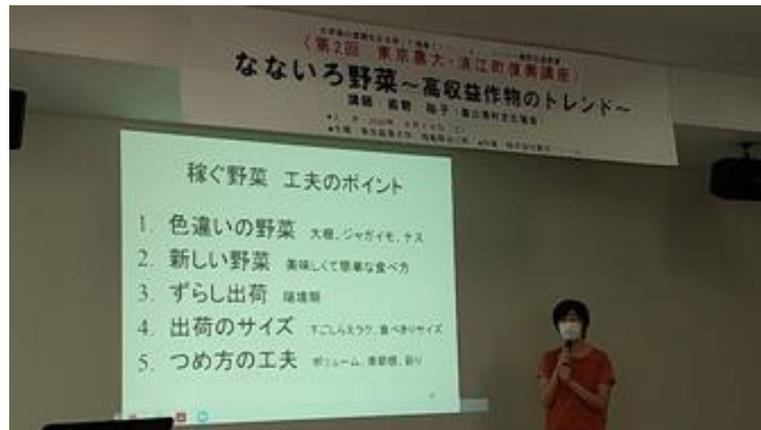
・7月18日 第1回東京農大・浪江町復興講座「道の駅で売れる農産物」(講師：伊藤啓一氏)を開催(浪江町地域スポーツセンター)

参加人数 21名：大学教員6名、学生6名(オンライン)、浪江町民9名

・8月29日 第2回東京農大・浪江町復興講座「なないろ元気野菜～高収益作物のトレンド～」(講師：能勢裕子氏)を開催(浪江町地域スポーツセンター)

参加人数 23名：大学教員5名(内オンライン1名)、学生6名(オンライン)

浪江町民12名



第2回東京農大・浪江町復興講座の様子

- ・9月19日 第3回東京農大・浪江町復興講座「押し寄せる野生動物と復興」（講師：山崎晃司氏）を開催（浪江町地域スポーツセンター）

参加人数 19名：大学教員 5名（内オンライン 3名）、学生 7名（オンライン）、浪江町民 7名

- ・10月17日 第4回東京農大・浪江町復興講座「地域資源の活用と六次産業化」（講師：小川繁幸氏）を開催（浪江町地域スポーツセンター）

参加人数 12名：大学側 教員等 4名（内オンライン 1名）、学生 3名（オンライン）、浪江町民 5名

- ・11月7日 第5回東京農大・浪江町復興講座「大堀相馬焼の鉢の桜の盆栽による復興支援と古里の風景創成」（講師：内山利勝氏、入江彰昭准教授、報告：八島妃彩氏、岡高志氏）を開催（浪江町道の駅なみえ）

参加人数 25名：大学教員 3名、学生 7名、浪江町民 15名

- ・12月19日 第6回東京農大・浪江町復興講座「地域の畑は自分たちで守る」（講師：宮川将人氏）および「浪江復興米」の販売実習を開催（浪江町地域スポーツセンター・道の駅なみえ）

参加人数 37名：大学教員 7名、学生 30名参加

- ・12月20日 第7回東京農大・浪江町復興講座「A級グルメで町おこし」（講師：寺本英仁氏）および「浪江復興米」販売実習を開催（浪江町地域スポーツセンター・道の駅なみえ）

参加人数 39名：大学教員 6名、学生 30名、浪江町民 3名参加

- ・1月16～17日 オホーツク・ウインターセミナー「地域素材を活用した農産加工開発」（講師：武内純子氏）、「地域を守る農業生産法人と地域食品企業の挑

戦」(講師：梶林克幸氏、津村健太氏)を実施

参加人数 18 名：大学教員 5 名、学生 10 名、浪江町民 3 名参加 (オンライン)



「浪江復興米」の販売実習の様子

2. 主として就農拡大やスマート農業推進に向けた事業

・10月3~4日 稲刈り実習&ドローン講習会(講師：菊地守氏)を開催(浪江町棚塩地区、地域スポーツセンター)

参加人数 36 名：大学教員 6 名、学生 30 名



稲刈り実習の様子

・11月8日 えごまの収穫(浪江町石井農園圃場)を実施

参加人数 14 名：大学教員 2 名、学生 7 名、浪江町民 5 名

・1月25日 景観樹木として桜を活用した地域おこし「桜の苗木の仮定植」を

## 実施（浪江町）

参加人数 7 名：大学教員 1 名、内山利勝氏ほか 2 名、浪江町民 4 名参加

### <成果>

コロナ禍により当初計画に対して活動が制限されたが、「東京農大・浪江町復興講座」を計 7 回実施し、参加者アンケートに基づき、地域課題やニーズに即した内容を実施した。6 次産業化のみならず、浜通り地域のイノシシ等の野生鳥獣被害対策に向けた新たな戦略作りや景観樹木としての桜の試験栽培を進展させた。

就農拡大・スマート農業推進への取組みとしては、(株)舞台ファームの協力のもと、学生が津波被害を受けた棚塩地区において 10 年ぶりの稲刈りを体験し、高性能のコンバインや農薬散布用のドローンの操縦体験行うことで、将来的な担い手育成に向けての技能向上につなげることができた。

6 次産業化推進の成果として、学生が収穫した米を「浪江復興米」として道の駅で販売体験を行い、浜通り地域の農業復興の象徴として地域・全国・海外へと発信できた（2 度にわたり「NHK ワールド JAPAN」で放映）。

さらに 6 次産業化の実践事例を学ぶため、本学が有する 6 次産業化の人材育成のノウハウや実践事例を収録したテキスト『6 次産業化の地平』を発行し、『北海道農業のトップランナーたち』をサブテキストとして、プロジェクトへの参加学生に貸与し「復興浪江学」で参加学生の知識向上や担い手育成につなげることができた。

また、これまで 3 年間の活動を通じては、大学教員や学生が現地で活動する拠点および活動基盤を構築することができた。そして、本学学生 2 名が本プロジェクトの「復興酒」企画で連携する鈴木酒造店（浪江町）に就職が内定し、地域への人材輩出につなげることができた。

### 課題・改善点：

今後の事業の継続的課題として、第 1 に活動資金があげられる。農生命科学研究所でも一定の予算を計上しているが、2021 年度以降は、大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業を申請中であり、採択されれば、過去 3 年間の実績をベースに、新規就農や 6 次産業化から地域活性化に向けた人材の定着につなげる取り組みとして実施していく。

連携企業の(株)舞台ファームの浪江町における経営規模は、2020年の30haに達していることから農業生産法人への就農も想定される。舞台ファームの営農チームとの連携による新規就農者の販路提供、栽培指導、最新鋭の農業設備のテスト、法人化支援に関しての本学による支援を教育・研究・交流促進活動として継続的に実施することで、地域に新しい農業の担い手と営農再開の基盤を作る。

今後は人材の定着に向けたインターン制度のシステム化や新規就農者の確保に向けた取り組みをよりいっそう強化していきたい。